

アメリカ女性宣教師の来日とその生活

——金城学院を例として——

篠田靖子*

はじめに

我が国の近代的な女子教育は、明治時代初期の20年間に次々と設立されたプロテスタント・ミッション系の女学校によって始められたと言っても過言ではない。この時代に我が国固有の近代的な女子教育機関としては、東京女子師範など数校があったに過ぎなかった。プロテスタント・ミッション系女学校を設立したのは、主としてアメリカから来日した女性宣教師たちであった。これらの学校は現在に至るまで、我が国の中学校から大学に至る女子の高等教育に大きな足跡を残している¹。

我が国の女子教育に貢献したアメリカの女性宣教師の名前は、学校の校舎や奨学金の名前などに付けられて人々に記憶されているが、その実像については意外に知られていない。確かに各学校が発行する創立記念誌(史)の中では、創設初期のヒロインとして美化されて語られることはあっても、

* 金城学院大学名誉教授

1 来日した女性宣教師の研究には、次の本がある。小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』東京大学、1992年。

その実像は余り知られることなく今日に至っている。

1960年代以降の世界的な規模での女性史研究の発展に触発されて、著者はアメリカ女性史の研究にここ30年余り携わってきた。19世紀の後半という時期の、男性でも海外に出かけることがほとんどなかった時代に、何故、女性が海を渡り未知の世界に飛び込んでキリスト教の伝導と教育事業に生涯を捧げたのであろうか。

世界的に著名な宣教師については個々の研究がなされてきたが、来日した多数の女性宣教師の実像を描くためには、個々の宣教師のパーソナル・ヒストリーを詳細に探るといふ膨大な作業が必要とされるために、女性宣教師の全体像を知ることは極めて困難であった。幸いなことに金城学院については、今は亡き真山光彌名誉教授が長年にわたって個々の宣教師の資料を現地を訪れて収集し、『金城を支えた人々』（金城学院大学キリスト教文化研究所、1995年）という冊子として出版されている。この研究は真山氏の業績に負うところが大きい。

著者の研究は、これらの研究業績を借りながら、女性宣教師を宣教のために自己犠牲となって奉仕したヒロインとしてではなく、19世紀後半から20世紀初めにかけて生きた一人の女性として捉えることを主眼とした。そのことと同時に、19世紀の後半にアメリカ合衆国の「南部」に生まれ育った女性ということにも著者の関心がある。金城学院がプロテスタントの南長老派の流れを汲むことは知られているが、19世紀後半のアメリカの南部一帯は他の地域とは非常に異なる社会的な立地条件に置かれていたことにも注目したい。要約して言うと、アメリカ合衆国の建国以来、長い間奴隷制を支えてきた南部社会は家父長制が強く支配しており、女性は他の地域よりも従属的な低い地位に追いやられてきた。その後南北戦争に敗れて奴隷を解放した南部は、戦後の一時期北部による軍事的な占領を受け、厳しい復興への道を歩まなければならなかった。アメリカの女性史研究においても、南部は最も女性解放の遅れた地域として取り扱われてき

た²。南北戦争後、南部から来日して金城学院の創設に携わった女性宣教師は、このような背景を背負ってやって来た人々であった。

来日した女性宣教師は、各教育機関で日本の女子教育に携わったが、それと同時にキリスト教の伝導と西洋文明を我が国に紹介するという役割をも担っていた。彼女たちの生活は一見華やかに見えたが、実際は異郷における長い孤独との戦いでもあった。しかし、自立した女性としての人生を異国で過ごすことによって、故郷に戻った時には、海外宣教のヒロインとしての名誉を惜しみなく与えられたのである。

第一章 アメリカ建国の理念と宗教

1607年、成功したイギリス最初の植民地ジェームズタウンが北アメリカ大陸に建設された時、総督のウィリアム・ブラッドフォードは入植の理念として、キリスト教の福音を世界に広めるという強い意志を表明した。この精神は後から植民地に入植してきた人々に受け継がれ、新世界にキリスト教を伝導する、具体的には先住民のインディアンに宣教する努力となって現れた。それ以前でもすでにフロリダ半島に上陸していた勇敢なカトリックの神父たちは、未知のアメリカ大陸を横切ってカリフォルニアに至る奥地へと宣教の旅に出かけていた。

1840年代ごろまでのアメリカ人にとっては、国内の領土拡張が主な関心事であり、北米大陸の陸続きの領土がアメリカ政府によって領有されるまでは、アメリカの主要なプロテスタントの伝導範囲は国内の西部地域に留まっていた。その後19世紀の半ば頃から次第に海外に目を向け始め、様々な教派が競って宣教師を海外に派遣するようになった。アメリカの場

2 南部の女性史については、次の本を参照した。Ellen Carol DuBois and Lynn Dumenil, *Through Women's Eyes, An American History*, Bedford/St. Martin's, 2005.

合は、海外と言っても先進地域であった大西洋方面には向かわず、後進地域であった太平洋方面に伝導の主眼が置かれたという特徴がある。しかも当時はアメリカは海外に植民地を持っていなかったことから、国益と海外伝導の利害が一致することは、少なくとも19世紀末の米西戦争（1898年）までは無かったと言ってよい。アメリカが海外に領土を獲得した米西戦争以後、第一次世界大戦までが海外伝導の最盛期であったが、それ以降は全般として海外伝導熱は次第に衰退していった。

アメリカには多数の宗教が共存しているが、キリスト教にもカトリックからアメリカ生まれのモルモン教などもある。しかしアメリカはWASPの国と言われるようにキリスト教のなかでもプロテスタントが主流をなしている。アメリカのプロテスタントの特徴は、数多くの教派（デノミネーション）に分かれている点である。アメリカの最近の年鑑を調べてみると150以上の教派名が列記されている³。この複雑なプロテスタントの教派を幾つかの分類法によって整理してみよう。先ず第一に、国家と教会が一致しているイギリスの英国国教会とは違い、アメリカは国家と教会が一致しない政教分離のフリー・チャーチ制を採っている。そのために、各人の意志によって教会が結成されるボランティアの教派型教会が多数乱立することを特徴としている。次に各教会が採用している政治体制に従って区分すると、ニューイングランドで栄えた会衆派、長老制度を採る長老派、バージニア州に多い監督派などに分けることができる。他方、教理的な区分に従えば、ルター派、生活規制が厳しいメソジスト派、洗礼の際に全身を水に浸す洗礼派などに分けられる。一方で同一の教派に属しながら、南北戦争中に国家が奴隷制をめぐる南北に分裂したため、長老派やメソジスト派、バプテスト派などは、それぞれ南長老派、南メソジスト派などに分裂した。金城学院を創設したのは南長老派であった。南メソジスト派や南

3 *The World Almanac and Book Facts*, 2005, pp. 714-715.

バプテスト派は現在も大きな勢力を維持しているが、南長老派と呼ばれる教派は現在は存在していない。そのほか長い間、教会では人種による分離が続いたために、今でも黒人を中心メンバーとする黒人教会がある。勿論、今では白人が多い教会に黒人が出席することも珍しくはなく、逆に白人が黒人を中心メンバーとした教会に出席するケースも前者ほどではないが見られる⁴。このように多数の教派が乱立しているために、19世紀の後半に各教派が競って海外伝導を行った理由ともなっている。

ここで南部の宗教について少し述べたい。アメリカの南部は建国当初からイギリスの英国国教の流れを汲み、また南部のことを「バイブル・ベルト」と呼ぶほど、アメリカのなかでは今なお宗教的な伝統が強く残っている保守的な地域である。第39代大統領ジミー・カーターに代表されるようにエバンジェリカル（福音派）な保守的な宗教観がその大きな特徴である。現在でも南部はアメリカのなかで教会に定期的に出席する人の数が最大である。その強力な宗教的伝統とそれにとまなう善と悪との強い観念が南部人の思考を支えている⁵。

第二章 プロテスタントの海外伝導と女性（その1）

1996年に出版された『来日メソジスト宣教師事典1873-1993年』の巻末には、この期間に来日したメソジスト宣教師の顔写真が掲載されているが、

4 アメリカの宗教については、次の本を参照にした。古屋安雄『現代アメリカ宗教の保守勢力』ヨルダン社、1984年。古屋安雄「アメリカの宗教は、今」齊藤真、大西直樹編『今、アメリカは』南雲堂、1995年。

5 アメリカの南部史については、井出義光『南部——もう一つのアメリカ』（東京大学、1978年）に詳しい。「南部はイギリス国教会の伝統をもつバイブル・ベルトであり、その強力な宗教的伝統とそれにとまなう善と悪の観念が南部人の思考や行動を支えたり、歪めたりしてきた」17頁。

その顔ぶれを見ると多数を占めたのが女性であったことに驚かされる⁶。これはメソジストだけのことでなく、アメリカの各教派共通の特徴であった。イギリスに比べると、アメリカのプロテスタントの海外伝導の開始はかなり遅かった。1812年にインドに派遣された8人（3人の妻を含む）がその最初と言われている。プロテスタントの場合は最初からカトリックのように単身の男性による伝導ではなかった。その後、徐々にプロテスタントの海外伝導は進んでいったが、前述したように国内開発（西部の領土獲得とインディアンの鎮圧）が優先する政策が続き、19世紀半ばには奴隷制をめぐる南北の対立が一触即発の状態に陥るなど、国内問題が山積していたために、なかなか本格的に海外に目を向けるには至らなかった。

19世紀の半ば過ぎから新興国アメリカの海外伝導は活発化したが、それでもイギリスに海外伝導の総出資金で追いつくには、次の世紀を待たねばならなかった。しかし、派遣した女性宣教師の数と女性自身の企画として誕生した女性伝導局（後述）が中心となって集めた資金の点では、19世紀末にはイギリスを凌駕するところとなった。この章では先ずこうした海外伝導を、国内にあって支えた人々、特に女性のことを取り上げ、次の章で実際に海外で伝導に従事した女性宣教師のことを取り上げたい。

海外伝導が軌道に乗るためには、各教派が海外伝導局を設けて宣教師を選出し、とりわけ伝導のための莫大な資金集めを継続的に行う必要があった。この仕事の多くを支えたのは、無給で奉仕した女性たちであった。特に大西洋岸の北東部では、教会活動の中心の担い手は女性たちであった。宗教の自由を求めてヨーロッパからアメリカ大陸に渡ってきた人々は、建国当初は教会の活動に熱心であったが、時が経過するとともに次第に世俗の事柄に関心が向かい、男性の教会離れが始まった。この時代に家庭にあ

6 ジャン・W・フランメル編『来日メソジスト宣教師事典 1873-1993年』教文館、1996年。

ってキリスト教の伝統を守ったのは主婦である女性たちであった。

18世紀後半から19世紀にかけてアメリカでは、女性と男性とは活動する分野が異なるという「領域」論が主張された。男性は家庭の外の世界での活躍が期待され、他方、女性には家庭内の「領域」が任された。女性は参政権をもって直接政治の世界に参加することは許されなかったが、自分の子供を共和国を支える立派な人間に育てることによって、間接的に政治に関与できると主張された。家庭教育の根幹としてのキリスト教が重視されたことは言うまでもない。家庭の「領域」に閉じ込められた女性が家庭の外で活躍できる場所は主として教会であった。教会の出席者の多くが女性によって占められ、牧師は専ら女性に向かって説教を行ったと言われていた。このために「教会の女性化」という言葉が使われた。

教会が女性化しても、原則的には女性が教会で発言したり、自分の言葉でお祈りを捧げることはタブーであった。女性が人前でお祈りをしたり、演説をすることは、女らしくない (unwomanly) 行為とみなされた。こうした制約にも関わらず、教会は女性の活躍が認められた唯一の公的な場所で、女性はあらゆる方法で教会の活動に参加した。その一つが献金を集めることであった。それまでにも女性は募金という形で社会に貢献したことがあった。アメリカがイギリス本国から独立を果たすために戦った独立戦争 (1775-83年) の際には、戦争を賄う財源を十分に持たない植民地政府を募金活動と国債の売却によって財政的に支援したのは、多数の無名の女性たちの物心両面での協力であった。南北戦争 (1861-65年) 中は多数にのぼった戦傷者を医療の面で助けるために働いた女性たちの他にも、多額の寄付金を集めて兵士の軍服を縫い、食料を調達した女性がいたことはよく知られている。すでに南北戦争前に北部の女性たちは奴隷制反対運動を通じて女性解放運動に目覚め、1848年にはアメリカ最初的女性運動の大

会がニューヨーク州西部のセネカ・フォールズで開催された⁷。またキリスト教的な母性を求められた女性が、貧しい人々を救うために慈善事業を展開したり、不幸な生い立ちのために売春婦に身を落とした女性を救済するために働いたことなどは、極く自然の流れであった。各プロテスタント教派のなかに外国伝導を促進するために海外伝導局が設けられると、女性たちは見知らぬ国の非キリスト教徒に伝導をするという大義のために、献金活動を開始した。その活動の中心となったのは、白人で中流社会層以上の女性たちであった。

当初は各教派の海外伝導局に送金をするという形を採っていたが、女性自身の発言力を増すために、1870年頃から女性伝導局が各教派の中に結成され始めた。女性伝導局が発足すると、彼女たちは独自に宣教師の選定を行い、海外に赴任する女性宣教師（夫に同行する妻を含む）の身支度を整えて送り出した。赴任した宣教師からの要望に対しても、金銭面だけではなく、精神的にも良き支援者となった。それまで女性は各派の海外伝導局に対して直接自分たちの意見を通すことは困難であったが、女性独自の組織を作ることによって、海外伝導に直接携わることが可能となった。北部を中心に発達したこの女性海外伝導局は大きな権限と組織力を発揮し、特に女性の海外伝導に大きな役割を果たした⁸。ただし、南部においては女性の組織作りが未発達であったために、女性伝導局があったとしても極めて影響力が限られていた。

19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカが海外伝導を猛烈な勢いで展開した背景には、海外に直接出かけて伝導に従事した宣教師の影に隠れて表面には見えにくい、こうして背後から海外宣教を物心両面で支えた

7 篠田靖子「全国女性榮譽の殿堂」北米エスニシティ研究会編『北米の小さな博物館』彩流社、2007年。

8 小檜山ルイ 前掲書には女性海外伝導局について詳しい研究がある。

無名の女性たちがいたことを忘れてはならない。

第三章 プロテスタントの海外伝導と女性（その2）

プロテスタントの海外伝導は、圧倒的に女性の活躍する場であった。当時女性は正式に牧師として宣教できる資格の按手礼（プロテスタントの聖職任命の儀式）を受けることができなかつたにも関わらず、何故、多くの女性が宣教師として活躍できたのであろうか。女性の宣教師は何か特別の資格を持っていたのか、または特別な信仰を持った女性達であったのか。宣教師としての生活はどのようなものであったのか。海外宣教師としての仕事を終えた後は、どのような生涯を送ったのであろうか。

伝導が開始された極く初期の19世紀初頭には、全く未知の世界に挑み、決死の覚悟で異教徒に伝導したというヒーローやヒロイン像が宣教師に当てはまったかもしれない。しかし伝導が軌道に乗った19世紀の半ば以降は、生命の危険と隣り合わせというような冒険的な仕事ではなくなりつつあった。特にこの研究で取り扱う異国でのキリスト教教育事業という宣教師の仕事は、冒険的な仕事ではなく、もっと知的な作業であった。

(1) 宣教師の教育歴

海外で宣教師としての人生を選択した女性は、当時のアメリカ社会に普通に存在していた信仰深い女性の典型的な人物であった。彼女たちの宣教師としての資格は正式の牧師としてではなかつたことは、すでに述べた通りである。と言うよりも当時は、また極く最近まで、女性は正式に聖職者の地位につくことを拒否されていたからである。一般的にいうと、彼女たちは当時の女性のなかでは、平均よりも高い教育を受けた人たちであった。女性宣教師の平均的な教育水準も、時代が進むにつれ、アメリカの教育制度の充実とともに向上していったが、19世紀の後半ではアメリカの中等

教育にあたるアカデミーやセミナーに一時期在籍したか、または卒業した人物が多数を占めていた。その後、アメリカの学校制度の充実により、セミナーなどから昇格した女子の高等教育が始まると、女子大学に一時期在籍した者か、その卒業生が宣教師になるようになった（当時は入学はしても正式に卒業する女性の数は非常に少なかった）。しかし彼女たちが20世紀に入って日本の女子大学で教える際には、英語やキリスト教の教師としての資格はあったが、学歴の点で日本の文部省からクレームが付けられることがあった。20世紀初期の我が国の大学の基準からすると、女性の宣教師は専門分野を教える大学の教育者としては力不足だと見なされるケースも出てきた。

(2) 宣教師と信仰

女性が宣教師として海外に出かけた直接的な動機として、特別に熱心なキリスト教徒であったと言う点だけを強調することは余り意味がないであろう。何故なら当時の平均的なアメリカの女性は現代の基準からすると極めて宗教的であったからである。後述するように、金城学院を支えた女性宣教師が海外伝導に踏み切った直接的な動機を調べると、自分の生活環境の周りに海外伝導を体験した人物がいたり、海外伝導局が発行していた機関紙、*The Missionary* を読む機会があつて応募したケースが多い。情報の発達が遅れていた時代には、身近に海外宣教の実情を教えてくれる環境が必要であった。彼女たちがアメリカで生活していた時には、精々、教会の日曜学校で奉仕したり、女性会のメンバーとして教会の活動に参加していた極く普通の女性であった。この点では海外伝導に従事した男性の宣教師は、少なくとも神学校を卒業し、実際に母国で宣教に従事した経験があつたのとは対照的である。女性が応募する際に信仰の内容が問われることは、海外伝導にだけ特別な資格ではなかった。例えば19世紀の中頃に、教員の供給過剰なアメリカの北東部諸州から教師不足の西部に女性教員を派遣す

る際、堅信を経験していないという理由から、採用を延期されることがあった。西部に派遣された女性は宣教師ではなく極く一般的な教師であったが、新しい任地では教会の礼拝に定期的に出席し、その地域の宗教上のリーダーとしての役割を果たすことが期待されていた⁹。女性が教員となる場合にキリスト教の信仰をもつことは、いわば常識であり、海外に派遣される宣教師だけに、特別に信仰の深さが問われるということではなかった。

(3) 宣教師と学校事業

何故、女性の宣教師は異国において教育事業に専念したのであろうか。海外宣教の目的は、大きく分けてキリスト教の直接の伝導、次に聖書の翻訳や宗教に関するパンフレットの出版や配付、第三番目には教育による伝導が考えられた（更に医療伝導を加えることもできる）。しかし前述のように挨拶を受けることのできなかつた女性にとって、第一と第二の役割を果たすことはできなかつた。第三番目の仕事は、実は海外で宣教師になった女性の多くが、母国にいたときから馴染んできた教職という職業であった。また、キリスト教を伝導するためには現地の女性の支持を得ることが是非とも必要とされた。男女の壁が厳しかったアジアの国々では、男性の宣教師が現地の女性の社会に入って伝導することはタブーに等しかった。女性の宣教師の活躍する場がここにあったのである。

元々、アメリカのプロテスタントの宣教は夫婦を単位として行われた。男性の宣教師が海外に派遣されることが決まると、急いで結婚して出発するケースが一般的であった。妻である女性にも宣教の役割が期待されていて、宣教師夫妻の給料には、妻に対する手当ても別途に支給されていた。しかし家庭を持った妻である女性が果たし得る活動範囲は自ずと限られて

9 アメリカ西部の教員像については、篠田靖子「フロンティアで活躍した女性教師たち」『アメリカ西部の女性史』明石書店、1999年。

いた。そこで独身の女性が注目されたのである。勿論、独身の男性の宣教師も数は少ないが存在したが、独身の女性宣教師ほどタフではなく、肉体的な病気や精神的な病に倒れて宣教を中断することが多かったと言われていた。従って宣教師の男女比は、数の上では女性が圧倒的に優位で、19世紀末には大体2対3の割合であった¹⁰。

宗教心をもった女性にとって、伝導に従事することは名誉な仕事であり生涯をかけるに値する職業であった。海外伝導に出かけた女性の多くは、アメリカ在住時代に教師としての経験があった。アメリカにおける19世紀の古い女性観によれば、女性が金銭を自分で稼ぐことは「女らしくない」と考えられ、結婚して男性に経済的に依存するのが、好ましい女性像であると言われていた。その中で唯一、女性が就労しても良いと考えられていた職業が教師であった。母親としての女性は家庭において自分の子供を教育し、立派なキリスト教徒として社会に送り出す役割を与えられていた。その延長線上に教師は考えられた。教師をしても「女らしさ」は失われないと主張されていた。女性の教育の進んだ北東部のニューイングランド地方では、早い時期から義務教育よりも少し高い教育を受けた女性にとって、教職は唯一といってよい「女らしさ」を失わない尊敬される職業となっていた。そのために教職は女性が集中する職業分野となり、「教職の女性化」がみられた。ただし、教師の女性化が進んだのは、女性の教師が特別に男性よりも優れていたからというよりも、女性は男性よりも安い給与で雇うことができたからである。

女性教師の給与は、平均すると男性の半分から三分の二であった¹¹。そ

10 1889年にはアメリカが海外に派遣した宣教師の総数は527名で、そのうち既婚男性が166名（ほぼ同数の夫人を含む）、独身の男性宣教師が34名、独身の女性は171名であった（小檜山ルイ 前掲書、20頁）。

11 篠田靖子『アメリカ西部の女性史』82頁。

れでも女性にとって数少ない就職のチャンスであったので、当時開発途上にあつた西部フロンティア地方に教師として東部から出稼ぎに出かけた女性もいた。また南北戦争後は、解放された南部黒人の子供に教育を授けるために設けられた黒人解放局の学校に出稼ぎに出かけた東部の女性もいた。しかし、アメリカでは初等科の義務教育制度が完成するには20世紀を待たなければならなかつたので、それまでは学校教育に従事する教師の地位は安定から程遠く、教師個人が生徒を集めて経営する小規模の私学や地区の教育委員会が農閑期だけに臨時的教員を雇うカントリー・スクールなどで、短期間教えるだけのものが多かつた。そのために契約期間も短く、教師は絶えず学校を転校して職を探さなければならなかつた。支払われる給料も精々300ドル以下で、女性一人の生活は辛うじて支えられたが、家族を養うには不十分な金額であつた。男性が教師の職を敬遠した理由の一つが教師の低賃金にあつたのである。

教育を受けた知識階級の女性の職業としては、その他に法律家、弁護士、医者などが考えられたが、これらの職業は特別な教育と資格が必要とされたために、普通の女性が容易に就業できるものではなかつた。また『アンクル・トムの小屋』(1852年)を書いて一躍脚光を浴びたハリエット・ピーチャー・ストウ夫人に代表されるように、19世紀には売れる女流作家が多数誕生し、作家として生計を立てる女性も登場した。しかし才能に恵まれ、上手く時流に乗ることのできた文筆家はほんの一握りであつた。平凡な知識階級の女性にとって、教師が最も手っとり早い職業であつたが、19世紀末になり、海外宣教が盛んになると、宣教師も女性が選ぶ職業の一つとして、次第に定着していったのである。

(4) 宣教師と結婚

教育を受けた普通の女性にとって、教師以外に目星しい職業はほとんど見当たらなかつた。女性の一生は結婚して男性に経済的に依存することが

大前提であった当時の社会でも、結婚するまでの一時期、教師として働くことには理解を示していた。当時の結婚年齢は22歳前後であったが、婚期を逸した女性にとって非常に生き難い時代であった。宣教師として海外で活躍した女性の多くが、この後者の年齢層の女性たちであった。そのために彼女たちは宣教師としての人生を全うする強い意志をもって現地に赴いたのである。勿論、若い結婚適齢期の女性が宣教師として海外に赴任するケースも見られたが、多くの場合、任期途中で仕事を断念するか、結婚してしまうかのいずれかで終わるケースが多かった。婚期を少し越えた女性は、任地でベター・ハーフを探すことになるが、後述する金城学院のケースにも見られるように、結婚の夢を果たせずに、生涯独身を強いられた女性宣教師も多かった。

(5) 宣教師と給与

宣教師の生活は、独身の女性の自活を保証した職場であった。海外伝導局から毎月支払われた給料は平均すると600ドル（教派によっては800ドル）で、住宅費や手伝いの人を雇ったり、アメリカとの往復旅費、支度金などは別途に支払われた¹²。従ってこの金額はアメリカに住んでいた男性の平均給与に比べても遜色ない上、アメリカの独身女性の給与と比べると平均を二倍以上も上回っていた。ましてや物価水準が低い日本やアジアの国々で生活するには十分な給料であったと考えられる。金城学院が設立された頃、ミッション系の学校に雇われた日本人教師の給与は、教頭で150ドル、平均すると79ドルに過ぎなかったもので、それらに比べると女性宣教師は給与面でかなり優遇されていたと言えるであろう。また後で詳しく述べるが、学校を建設するための費用や伝導のための諸費用は別会計で処

12 『金城学院百年史』金城学院百年史編集委員会、1996年、83-84頁。佐々頌『宣教師・アニーの生涯』中日出版社、1998年、59頁。

理されていた。

夫婦で赴任した宣教師の場合は、男性は独身の女性と同額かもしくは200ドルくらい上乘せされ、更に妻に対して300ドル、同伴した子供一人に100ドルが付加されたので、合計で1200ドル近く支払われていた。男性と女性の宣教師の給与面での差別は、教派によって若干異なっていたが、平等のケースの方が多く、夫婦で赴任した場合は住宅費などの面で彼らを特別に優遇するケースが多かった¹³。

(6) 宣教師の赴任期間

宣教師に応募する際に、凡そ5年間の任期が提示されるのが一般的であった。それ以上短期間であると、任地に馴染むこともできず、宣教の目的を果たせないからである。赴任して最初の1年から2年は語学の習得のために費やされた。任期が5年と指定されていても、仕事に慣れた頃に帰国してしまうことも多く、任期を全うしないケースのほうが過半数を占めていた。病気がその中で一番多い原因であったが、それと肩を並べて多数を占めたのが、女性の場合は結婚による中断であった。すでに述べたように未婚の女性が海外に派遣された際の最大の難点は、結婚問題であった。若い適齢期の女性が海外に派遣されても、多くの場合、赴任期間の5年を待たずして結婚のために止めてしまうケースが出てきた。これに対して赴任時が20歳代後半以降の女性になると、定着率が高くなる傾向が見られた。これは極めて自然なことで、宣教師派遣の時期が丁度、女性の結婚適齢期と重なることからくる問題点であった。一度海外に出てしまうと、本国出身の男性と出会うチャンスが極めて限られてしまうために、宣教師になることは生涯独身を覚悟しなければならぬと言われていた。勿論、現地の男性との結婚の可能性もあったが、現在と違って結婚における国境を越え

13 『金城学院百年史』115-116頁。

た交婚は極めて例外的な時代であり、彼女たちが現地で交流をもてる独身の男性はほとんどいなかった。宗教上の問題もあった。在任中の結婚としては、夫婦が赴任した宣教師の妻が死亡した場合、独身の女性宣教師と再婚するケースがしばしば見られた。

また在任中は原則的には平均して5年に一度、一年間本国に帰国することが許されたが、時には宣教師の集会在アメリカで開催され、短期間帰国することもあった。そのような際は、独身の女性が配偶者を探す絶好のチャンスであった。金城学院のケースでも、帰国中に結婚してしまって日本に戻ってこなかった宣教師がいた。海外伝導局は未婚の女性の帰国は原則として認めるべきではないとまで述べ、折角現地に慣れた宣教師の辞職を残念がった。

結婚のチャンスを捉えることのできなかった女性宣教師は、生涯独身を余儀なくされた。こうした女性は学校の学寮などに寝泊まりして、学生と生活を共にすることによって、寮母としての母性を学生に惜しみなく与えた者もいた。また一般に70歳になると宣教師に定年が訪れ母国に帰国するのが通常であったが、なかには現地在任中に逝去して、そのまま現地の墓地に埋葬された宣教師もいた。

(7) 宣教師の妻の役割

アメリカのプロテスタントの男性宣教師は多くの場合、妻子を同行して宣教にあたったことは既に述べた通りである。宣教師の妻は、アシスタント・ミッションナリーと呼ばれ、妻にも伝導の任務を与えていた。そのため、妻にも月給という形で、独身の女性宣教師の二分の一程度の月給が支払われていた。家族ぐるみでの伝導の目的は、アメリカの良きクリスチャン・ホームを実際に現地の人々に見せるためであった。宣教師の妻は、独身の女性ほど身軽に宣教活動はできなかったが、アメリカの料理、ケーキ作り、ベッド・メーカーなどを教えたり、アメリカのマナーを実践する

役割を担っていた。学校の関係者であれば、学生を数人ずつ自宅に招いて英語の実習をしながら、アメリカの家庭生活を体験させたりした。彼女たちは直接伝導に携わる機会は少なかったが、キリスト教の伝導という堅苦しさを離れて、現地の人にキリスト教とアメリカ文化にたいして関心をもってもらうという大きな役割を果たしていた。妻として夫の伝導を助け、母として子供の教育を担うということは、取りもなおさず典型的な良きアメリカの女性像と一致していた。

(8) 宣教師の仕事

この研究では女性宣教師の教育活動に焦点を絞っているが、直接伝導に携わって現地女性のバイブル・ウーマンの養成に携わった人々や医療宣教師として現地の女性や子供たちの医療救済にあたった宣教師もいた。ただし、日本では医療宣教活動は余り成功しなかった分野である。

教育分野で活躍した女性宣教師は、学校の経営と教育を通して直接、現地の人々と接した。彼女たちが担当した教科は、英語とキリスト教が中心で、アメリカの理想的な家庭を示すために家庭科、料理、マナーなども教科として取り上げられた。20世紀に入って日本の女学校が大学に昇格すると、英語やキリスト教以外の専門科目を教えることが要求されるようになった。金城学院の場合は、音楽教育に力を入れるようになると、アメリカで音楽を専攻した女性を好んで採用するようになり、ただ英語が話せて信仰深い女性というだけでは、十分に教師として通用し難くなっていった。

宣教師は日曜日の教会の礼拝に出席して、キリスト教徒としての模範を示すことは勿論であった。地域の宣教活動にも積極的に参加し、現地のバイブル・ウーマンの育成にも貢献した。

宣教師の仕事として表面には出てこないが、実際には手紙や報告書をアメリカの伝導局、宣教活動を支持してくれる資金援助団体や個人に送り、絶えず海外宣教の現状と必要とをアピールすることが、宣教活動を継続す

るために、最も必要とされた宣教師の仕事であった。海外伝導はその初期には物珍しさもあって、人々の関心を呼びやすいが、その後も継続的な資金の援助の必要性を、あらゆる機会を捉えてアピールし続ける必要があった。また、自分達の後継者をつくるためにも、具体的な仕事の内容と重要性とを知らせる必要があった。海外伝導局の機関紙 *The Missionary* (1868–1911, The Executive Committee of Foreign Missions, P.C.U.S.) はアメリカの海外伝導局と現地の宣教の現場とを結ぶ重要な連絡紙で、これを読んで宣教のための献金を継続したり、時には新しい事業計画のために献金を開始する教会のメンバーがいた。更にはこの機関紙を読んで海外宣教を決心した女性宣教師も現れた。

宣教師はできるだけ定期的に現地の活動報告を行って、宣教の成果を海外伝導局に報告すると同時に、新しい計画を提案する必要があった。新しい校舎の建設や学生を集めるために奨学金制度を設けるためには、膨大な予算を必要とした。こうした計画を直接支持者に訴えるためには、定期的に認められた一年間の帰国期間を、募金行脚のために使うことがよく行われた。彼女たちは海外伝導局から月給を受け取っていたが、単に決められた活動を行うだけではなく、積極的にミッションの活動をリードする役割を与えられていたのである。そのために宣教師は報告書作りと手紙書きに膨大な時間を割いたと言われている。

宣教師にとっての大きなジレンマの一つは、母国の支持者たちが海外伝導に求めているものと現実とのギャップであった。アメリカの支持者が最も期待していたのは、現地の人々が多数洗礼を受けてキリスト教徒になることであった。そのために機関紙には絶えず何名の人が受洗したかという数字が掲載された。しかし教育の現場で働いている宣教師は、短期間にその要望に応えることがいかに困難であるかを体験していた。金城学院の場合も、創立当初は在校生も少なく、卒業生のなかで洗礼を受ける者の割合が高かったが、学院の拡大とともに、次第に期待されたほどには受洗者の

数が増加しなくなる傾向を示した。短期的に宣教の結果を求める本国の支持者には、受洗者の報告が出ないと宣教師の怠慢と受け取られ、結果として宣教活動への関心を弱めることになりかねなかった。宣教師は支持者の関心を繋ぎ止めるために、できるだけ詳しい活動報告を頻繁に送り、支持者に宣教の必要をアピールし続けた。

(9) 帰国後の宣教師たち

任期中に病気で帰国したり、病死した宣教師の数はかなりの人数にのぼった。医療が発達していなかった当時は平均寿命が短い上に、現地での医療水準が本国よりも低かったことも、その原因の一つであった。中国に派遣された宣教師は、病気の治療や保養のため、定期的に日本を訪れていた。また赴任中に病気のためにアメリカに一時帰国した後、回復をまって再任する場合もあった。

定年を迎えて帰国した場合は、親戚や母教会の近くに家を構え、健康が許せば赴任中の体験を生かして聖書研究所や宣教師訓練所などで宣教史や宣教方法論などの講義を受け持った。母教会では女性会などのリーダーとして活躍し、特に海外の宣教活動を支援するための資金集めに力を注いだ。また後輩の女性に働きかけて、新しい女性宣教師のリクルートにも貢献した。母教会では彼女たちの偉業を顕彰するために、写真を教会の壁に掲示したり、教会内のサークル名や奨学金の名前を宣教師からとって、彼女たちの労苦を労った。

第四章 金城学院の誕生とそれを支えた宣教師たち

来日した女性宣教師の実像を知るために、1889年（明治22年）アメリカ南長老派によって名古屋に創立された金城学院について、具体的な宣教師の実名を挙げて検証していきたい。アメリカの長老派から日本に派遣さ

れた宣教師については、アメリカ人研究者による未刊の博士論文¹⁴があるが、それだけでは女性史的な観点から分析するには十分な資料は得られない。しかし金城学院に関しては前述の真山光彌教授の『金城を支えた人々』という資料があるので、その他の資料の助けを借りながら、来日して金城学院に奉仕した女性宣教師の姿を明らかにしていきたい。

(1) 金城学院誕生の歴史

金城学院は名古屋市内にあり、現在は幼稚園から大学、大学院に至る大規模な女子の教育機関で、2009年には創立120年を迎えようとしている。学院は1889年、アメリカの南長老派の支援で創設された。日本には19世紀後半にアメリカの宣教師によってミッション系の女学校が30数校設立されたが、金城学院はその中の一校である。金城はその中では創立が最も遅く、また南長老派の流れを汲むただ一つの教育機関である¹⁵。

14 James Arthur Cogswell, *A Handbook of Missionaries to Japan from the Presbyterian Church in the United States, 1885–1960*, May 1961.

15 佐々頌 前掲書, 59頁。小椋山ルイ 前掲書, 184–186頁。主なミッション系の女学校の創立年とプロテスタント教派名を記す。

- 1870年 フェリス女学院 (ミス・キダーの学校) オランダ改革派
- 1871年 横浜共立学園 女性一致海外伝導局
- 1873年 女子学院 長老派
- 1874年 青山学院 メソジスト監督派
- 1875年 神戸女学院 アメリカン・ボード
平安女学院 聖公会
梅光学園 オランダ改革派
- 1876年 女子学院 (元B六番女学校) 長老派
女子学院 長老派 (1881年より)
同志社 (女子) アメリカン・ボード
- 1877年 立教女学院 聖公会
青山学院 メソジスト監督派
- 1879年 活水学院 メソジスト監督派
プール女学院 CMS-イギリス系

創立当初は、「ミセス・ランドルフの学校」と呼ばれていた。この時代に創立された多くの学校と同様に、創設の中心となった女性宣教師の名前をとって、このように呼ばれたのである。すでに述べたように、来日した多くの女性宣教師は本国にあった時から、教職に従事していた。19世紀後半に教職を志したアメリカの女性にとっての最終的な目標は自分の学校を持つことであり、その学校を良家の子女が集まる名門校とすることであった。後で詳しく紹介するが、南長老派から派遣されて長年、中国で主に孤児の教育にあたってきたアニー・ランドルフ夫人（未亡人）は、健康上

-
- 1880年 成美学園 メソジスト・プロテスタント派
 - 1882年 遺愛学院 メソジスト監督派
 - 1884年 大阪女学院 カンバーランド長老派
東洋英和女学院 カナダ・メソジスト教会
 - 1885年 北陸学院 長老派
福岡女学院 メソジスト監督派
 - 1886年 大阪女学院 長老派
広島女学院 南部メソジスト監督派
弘前学院 メソジスト監督派
宮城女学院 アメリカ・ドイツ改革派
松山東雲学院 アメリカン・ボード
捜真女学校 バプティスト派
 - 1887年 香蘭女学校 SPG-イギリス系
北星学園 長老派
普連土学園 クェーカー
静岡英和女学院 カナダ・メソジスト教会
 - 1888年 共愛学園 アメリカン・ボード
 - 1889年 山梨英和学院 カナダ・メソジスト教会
金城学院 長老派（南）
（特に国籍の記載のない学校はアメリカ系）

こうした教派別の女学校の設立には、資金力、人材などの点で非効率的であることが反省され、20世紀に入ると超党派の協力による女子大学建設の構想が生まれ、財団が創設されて、「東洋に七つの女子大学」が誕生した。日本では東京女子大学がそれに当たる。（小椋山ルイ「友情の帝国——「東洋の七つの女子大学」に見るアメリカ的「帝国主義の文化」——」紀平英作・油井大三郎『グローバルゼーションと帝国』ミネルヴァ書房、2003年、89-114頁）

の理由から本国への帰国を命じられた際に日本に立ち寄り、たまたま同僚の宣教師から名古屋に来て暫く英語を教えるように頼まれたのがきっかけで、来名した。若い時期に未亡人となったランドルフ夫人は、27歳の時から経済的な自立のために妹と共にアメリカ南部のあちこちで学校を創って教えて生計を立ててきた。45歳の時、召命を受け、宣教師として中国に渡った。中国では外国から来た宣教師に強い警戒心をもっていたので、宣教師が一般の教育事業に参入することは叶わず、主に孤児の救済とその教育に従事せざるを得なかった。これと対照的な態度を取ったのが日本であった。日本では、キリスト教にたいする偏見はあったものの、外国人のキリスト教徒が創設した学校に中流の品格ある家庭の子女が競って入学する傾向があった。日本は開国以来、伝統的な階層社会が少しずつ緩み、近代化が始まっていた。そのためにキリスト教の受け入れそのものよりも、西洋文明の代理者としての宣教師による女子教育を比較的容易に受け入れ、前述したように19世紀の後半には30数校のプロテスタント系の女学校が創設されたのである。こうした学校で学んだのは士族、裕福な商家、大規模農家や西洋の文明に憧れる知識人たちの子女であった。名門校を創設したいという女性宣教師の持つ野望とはその意味で一致したのである。

たまたま男子の英語塾の一時的な手伝いのために名古屋に誘われたランドルフは、来日2年目にして、長年の夢であった女子の教育機関を創設する決意をするのである。しかし、その前途には二つの大きな障害があった。一つは名古屋には当時、浄土真宗の多くの寺院があって保守的な仏教の影響力が強く、遊廓があったり、名古屋鎮台がある軍都でもあった。南長老派の宣教師が来名するまでは、「偶像の町」「ソドムの町」名古屋には定住した宣教師も少なく、キリスト教を受け入れる基盤はほとんどなかった。

第二の、しかもっと大きな障害は、宣教師を名古屋に派遣した南長老派とその出身地、アメリカの南部社会にあった。すでに述べたように、南北戦争に敗れた南部は、経済的にもこれまでの奴隷制を基盤とした農業社

会から、北部のように工業と農業とのバランスのとれた近代経済を目指す「新南部」計画を唱えていたが、現実には長年にわたって奴隷に資本を投下してきたために、経済の近代化のための資本が不足し、旧態依然たる農業経済から脱却できないでいた。このために、その後長い間、南部は「貧困な南部」、「文化不毛の地」と呼ばれることになった。北東部ではすでに始まっていた女性解放運動も南部ではほとんど起こらず、旧態依然たる家父長制が支配していた。女子教育のアカデミーやセミナリーなどの中等教育機関やそこから発達した女子大学もあったが、その実態は19世紀半ばから目ざましい発展を遂げた北部の女子大学に比べると、ほとんど名ばかりのものであった。南部でも中等・高等教育機関に入学する女性はいいたが、卒業生の数は極端に少ないという特徴が当時の人口統計から明らかにされる。長い間、家父長制の男性優位、女性従属の社会が続いたために、女子の高等教育の必要にたいする社会の認識が極めて低い傾向が見られた。

来日して2年も経たない1889年9月、ランドルフは「女性の地位の低い名古屋に女子」のための学校を建設することを思い立った。しかしもともと南長老派は日本に女学校を建設する意図を持っていなかった。ランドルフを名古屋に迎え入れた南長老派の男性牧師ロバート・マカルピンも女子教育にたいする情熱を持っていなかったが、たまたまマカルピンの姉ポーリン・M・デュボースが中国時代のランドルフの活躍を良く知っており、ランドルフの女学校を設立したいという提案を支持するように弟のマカルピンに強く働きかけたので、彼もしぶしぶ同意したという経緯があった。

前述したように給与面では女性の宣教師は男性とほぼ同等に取り扱われたが、宣教の活動方針を決定するミッション年会での投票権は女性には与えられていなかった。その点では女性の宣教師は男性の支配下にあったと言ってよい。男性側からすれば、女性の宣教師は中等教育程度の学力（男性はほとんどが神学大学卒以上）しかなく、伝導の経験も母国にいた時に日曜学校で少し教えていた程度で、男性側からすると宣教師として女性を

対等に取り扱うことには抵抗があった。他方で、数では女性の宣教師が男性のそれを上回り、女性の助けなしには伝導活動を広げることはできないというジレンマがあった。

ランドルフの学校創立はいわば、彼女が人生の晩年にかけた賭であった。1889年、ミッションの例会で女学校の建設が認められ、本部の伝導局からランドルフ個人に学校建設の費用として年額580ドル（宣教師一人の年給とほぼ同額）が送金されることになり、「ミセス・ランドルフの学校」が創設された。建学当初は学生数も僅か3名で、しかも3人とも名古屋近郊の出身者ではなく、ほかの地域のクリスチャン家庭の子女であったことは、名古屋の保守性をよく示している。ランドルフ自身は建学して3年後の1893年には体調を崩して帰国しているが、学校建設という夢を名古屋の地で実現できたことには、大きな満足があったであろう。

(2) 金城学院を支えた人々

私立の学校は建学の精神を高揚し、内外に学校の存在をアピールするために、定期的に記念誌(史)を発刊している場合が多い。そのなかには、往々にして建学に関わった人々を美化し、英雄視する傾向が見られる。そのために日本の女子教育の発展に貢献したプロテスタントの女性宣教師を「聖女」に仕立て挙げ、犠牲的な側面を過大に評価することによって、実際にその時代に生きたアメリカ女性という視点が往々にして薄れてしまう傾向が見られる。世界のキリスト教化という理念の一翼を担う心構えをもって来日したが、それと同時に、一人の女性として独立した生計を立てる必要から、選択の自由として宣教師としての人生を選んだ女性の生涯という視点から、彼女たちを見直してみたい。

金城学院は、すでに述べたように南長老派教会の海外伝導局の援助によって、ランドルフと彼女の計画を支持した来名ミッション最初の宣教師ロバート・マカルピンらによって始められた。その後、多数の宣教師たちが

この計画を実行するために続々と訪れたが、学校は次第に南長老派海外伝導局の直接的な管轄から離れ、1938年には日本キリスト教会の教会所属学校となって分離した。

この章では、女学校発足から約80年間にわたって金城学院を支えた8名の女性宣教師を一人一人取り上げ、出身地、学歴、来日以前のアメリカでの職歴、来日の理由、結婚の有無などについて取りまとめてみたい。金城学院に奉職した女性宣教師はこの間に短期間の者を入れると、更に何倍もの人数の名前を挙げることができるが、彼女たちはいずれも短期間で帰国または転出しているので、ここでは詳しく取り上げない。こうした個別の女性宣教師の資料を集めることによって、我が国の女子教育に貢献したアメリカのプロテスタントの宣教師像が明らかになる筈である。

ここでアメリカ「南部」の地理的な定義を少ししておく必要がある。アメリカ合衆国はしばしば北部、西部、南部の三大地域に分けられるが、南部は歴史的に南北戦争に際し、南部11州が南部連合国という別の国家を形成したので、地理的にはその11州を南部と規定すると比較的分かりやすい。しかし南部連合以外にも南部的な州があることを考慮すると、メキシコ湾、大西洋、メイソン・デクソン線、オハイオ川、ミシシッピ川に囲まれ、さらにアーカンソー州南東部半分とテキサス州南東部を含めた地域を南部と規定するのが一般的である。

④ アニー・ランドルフ (1827-1902年)

Elizabeth Annie Priscilla Edgar Randolph

在任期間 1888年末-1892年11月 (4年間) 60歳から64歳

それ以前は中国で宣教師 (1872-1888年) 16年間

出身地 ヴァージニア州ユニオン

学歴 不明

職歴 夫の死後、アメリカ南部各地で教師 (17年)、中国で孤児の

ための教育（16年）、金城学院（4年）

結婚 26歳の時に未亡人に

志望の動機 所属する教会の牧師が海外宣教師であった

③ オナ・パタソン（1865-1955年） Elizabeth Ona Josephine Patterson

在任期間 1892年8月-1894年4月（1年8カ月）

27歳で来日，結婚のため辞任

出身地 ノースカロライナ州ホープウェル

学歴 シャーロット・フィーメール・インスティテュート

職歴 2カ所の学校で教師（2年間）

結婚 来日していたC.K.カミング牧師と29歳の時、金城学院で結婚

志望の動機 幼なじみの日本派遣の男子宣教師の手紙を読んで

④ エラ・ヒューストン（1864-1912年） Ella Houston

在任期間 1893年2月-1912年4月（19年間）

29歳で来日，名古屋で逝去

出身地 ノースカロライナ州ハンタースヴィル

学歴 メアリー・ボールドウィン・セミナリー卒 又は中退

職歴 公立学校で3年間教師

結婚 生涯独身

志望の動機 ③のオナ・パタソンと同じ教会で同じ動機

⑤ シャーロット・タムソン（1882-1955年） Charlotte Thompson

在任期間 1908年-1916年（8年間）26歳で来日，休暇帰国中に結婚

出身地 サウスカロライナ州リバティー・ヒル

学歴 ウィンスロップ・カレッジ卒

職歴 公立学校で3年間教師

結婚 34歳の時，休暇中にアメリカで出会った牧師と結婚

志望の動機 ニューヨークのバイブル・スクールで1年間勉強したこと

㊦ リーラ・カートランド (1877-1955年) Leila Griffing Kirtland

- 在任期間 1910年-1932年(21年10ヵ月) 33歳で来日。
退職後、丸亀で福音伝導師に
- 出身地 テネシー州メンフィス
- 学歴 クララ・コンウェイ・インスティテュート及びニューヨークの音楽専門学校(初めての専門分野を持った宣教師)
- 職歴 5年間の教師
- 結婚 多くの同僚が結婚のために退職すると寂しさから55歳の時に辞職して伝導師に。独身
- 志望の動機 外国伝導局の機関紙『ザ・ミッショナリー』(*The Missionary*)で金城が音楽の教師を求めていることを知り

㊧ メリー・スマイス (1890-1979年) Mary Irwin Fletcher Smythe

- 在任期間 1917年-1939年, 1947年-1957年(37年間)
27歳の時、宣教師の夫チェヴィス・スマイス夫人として来日。戦中を除き67歳まで学院のために貢献。学院に多額の寄付をする。勲五等瑞宝章など多数の賞を受賞。
- 出身地 ヴァージニア州アコマックの名門の生まれ
- 学歴 ランドルフ・メーソン・ウーマンズ・カレッジ卒
- 職歴 なし
- 志望の動機 宣教師の夫が愛知県豊橋で伝導に従事したため。請われて金城で教鞭をとり、夫の死後も理事としても活躍。子供なし。

㊨ ベス・ブレクニー・マッキルエン (1891-1935年)

Bess Martin Blakeney McIlwaine

- 在任期間 1921年-1927年(6年間) 病気のために帰国。来日は30歳。
- 出身地 ノースカロライナ州マッシュューズ
- 学歴 クイーンズ・カレッジ卒
- 職歴 高等学校の教師や校長(6年間)

結婚 日本派遣の宣教師と再婚（40歳の時）
志望の動機 牧師，宣教師，教育者の家庭に生まれた。

① マーガレット・アーチボルド（1899-1983年）

Margaret Morton Archibald

在任期間 1930年から戦中を除き1969年まで，39年間。来日は31歳。
出身地 アラバマ州バーミンガム
学歴 バーミンガム師範学校卒，アラバマ州立大学で単位取得
職歴 教師や母教会の秘書
結婚 生涯独身。金城では自発的に学寮に学生と一緒に住む。
志望の動機 教会の秘書をしていて

（真山光彌著『金城を支えた人々』より作成，*アンダーラインをしたのは来日時の年齢）

(i) 在任期間と来日時の年齢

ここに掲げた8名のみが金城学院に奉職した女性の宣教師ではなく，その他にも短期間貢献した多数の女性がいた。しかし上記の8名は，滞在期間の長さにおいても，貢献度においても，その他の宣教師を遙に凌いでいた。

上記の7名の宣教師と短期間金城に勤めて離職した教師との大きな相違は，来日した際の年齢にあった（⑥のメリー・スマイスは来日した時から夫人であったので例外として取り扱う）。上記の7名の宣教師が来日した時には，いわゆる結婚適齢期（この時代は平均すると22歳であった）を過ぎた女性であった。彼女たちは20歳代の後半で，30歳を越えた者もいた。19世紀後半から20世紀の初めにかけてのアメリカ社会では，独身の女性は社会の中の半端者で，家族の厄介者と見られていた。特に封建的な家族制度の南部では，結婚適齢期を逸した女性は，家族のなかに居場所を見つけるのが困難であったと言われている。

20歳代の前半で来日した若い女性宣教師は、日本での経験を積む前に離日して結婚する傾向にあったが、他方、適齢期を越えた女性の場合は日本に腰を落ちつけて仕事に励むケースが多かった。勿論、彼女たちもチャンスがあれば結婚もしくは再婚の相手を探しており、⑩のオナ・パタソンは、日本で伝導に従事していたC・K・カミングと出会って結婚し、学校を退職して福音伝導に変わった。⑪のシャーロット・タムソンのケースは、米国南長老派の女性協議会に出席するため短期間、特別にアメリカに帰国を許された際に、アンドルー・M・マクラクリン牧師との間にロマンスの花が咲き、そのまま日本に戻らないで結婚してしまった。当時の機関紙は「休暇帰国は未婚の女性には危険なので、既婚者に制限されるべきです」という文章を載せ、女性宣教師の結婚問題を皮肉を込めて取り扱っている¹⁶。宣教師として独身生活が長期になると、異国で一人で生活する寂しさを訴える手紙を本国に送る宣教師が多く、その寂しさを紛らわせるために⑫のマーガレット・アーチボルドのように、自発的に学生と寝食を共にして「学寮の母」と呼ばれた宣教師は、金城以外の学校でもかなり見られた。

(ii) 出身地

出身地は全員がアメリカの南部で、日本に来る以前も帰国後も南部の地を生涯離れることがなかった。アメリカ人は地理的な移動性の高い国民であると言われており、多くのアメリカ人は東部から西部へとフロンティアを求めて移住を繰り返したが、南部人に限ると移動性は極めて少なく、生涯、南部を離れることはなかった（この傾向は極く最近まで続いていた。南部の保守性はこのような所にも現れている）。宣教師たちは南部で生まれ、そこで教育を受け、南部の教会に通い、南部の学校で教え、海外の宣

16 真山光彌『金城を支えた人々』金城学院大学キリスト教文化研究所、1995年、34-35頁。

教から帰国してからも南部に留まった。このように考えると、南部人が海外へ伝導に旅立つことは、他のアメリカ人よりかなり強い決断が必要であったであろう。しかし、元々バイブル・ベルトに生まれ、宗教的な家庭環境で育っていたので、一度決意すると宣教師としての任務に目覚め、大きな働きをすることができたのであろう。

(iii) 学歴

全宣教師に共通して言えることは、当時としては、平均より高い学歴をもっていたことである。さらに上記の8人の宣教師を比較すると、時代とともに、アメリカ合衆国の学校制度の充実とともに、学歴が次第に上がっていったことが判る。彼女たちは、少なくとも女子の中等教育であったアカデミーかセミナリーに在学または卒業しており、時代とともにカレッジの卒業生が増えていった。日本で教職についた場合も、時代とともに宣教師に高い学歴や専門性が要求されるようになっていった。

ここでアメリカ南部の教育制度、とりわけ女子教育の特徴について考えたい。19世紀末のアメリカの女子高等教育の統計を見ると、女子の高等教育機関の数では南部と他の地域との間に差異は余り見られないが、南部では在校生の数が人口に比較したときに極端に少なく、卒業生の数はさらに少ない傾向が見られた。また南部の女子高等機関は学校収入の点でも、北部のその五分の一以下に過ぎなかった。この傾向は女子の教育機関だけに限った現象ではなかった。1900年、南部のすべての大学の総収入は、ハーヴァード大学一校の収入を下回っていた¹⁷。南部の教育水準は全国的に見て最低で、南部白人の文盲率は全国平均の2倍以上であった。黒人の教育は奴隷解放以来、人種別の教育が僅かに北部出身のボランティアによって行われていただけで、その水準が白人の学校を遙に下回っていたこと

17 *Statistical Abstract of the United States*, the Bureau of Statistics under the Direction of the Secretary of the Treasury. No. 23 (1900), p. 413.

は言うまでもない。

南部の教育制度の一つの特徴は、教会と密接に結びついて発達してきたことである。植民地時代から他の地域のように公教育制度は発達せず、南部社会のエリート層は子供を母国のイギリスに留学させて高い教育を受けさせ、一般の子供は教会付属の貧しい学校に通って読み書きを習う程度の低いレベルのものであった。南部の高等教育機関もほとんどが教会に付属されたもので、宗教的な色彩が強く、学問的な水準では他の地域の学校より遙かに劣っていた。南部の女子の大学教育もこの例外ではなかった。北部では19世紀の中頃にはマウントホリーヨーク（1837年）、ヴァッサー（1865年）、ウェルズレイ（1875年）、スミス（1875年）、プリンマー（1884年）などの名門女子大学が次々に誕生した。一方、南部では1834年にジャドソン、1842年にメアリ・ボールドウイン、更に1889年にアグネス・スコットが誕生したが、いずれも教会の付属という形から発展したもので、アカデミックな内容の乏しい学校であった。1889年に④のランドルフ夫人が名古屋の地に女学校を設立しようと提案した際に、南長老派ミッションにはその意図がなかったことは、すでに述べた通りである。南部の社会は女子の教育、特に高等教育にたいする関心が低く、北部から来たプロテスタントの宣教師たちが多くの女学校を次々に日本に創設したのとは対照的であった。南長老派の最初の男性宣教師で南部人のロバート・マカルピンが、女学校を名古屋に設立する意図を持っていなかったとしても不思議ではなかった。たまたまマカルピンの実姉が中国宣教師時代のランドルフを個人的に知っていて、彼女の説得に促されてマカルピンが同意することとなり、この偶然によって金城が誕生したのである。

南長老派から派遣された女性宣教師は、南部自体がパイブル・ベルトと呼ばれているように、宗教的な環境においては他の地域よりも恵まれていたが、教養ある高学歴の女性の生きる環境としては南部社会は厳しいものがあつた。次に述べるように、高学歴の南部の女性が職業を選択すること

は、他の地域に比べてより困難であった。また女性が自立して生きることに対して、社会は厳しい目を注いでいた。

(iv) 職歴

すでに述べたように、アメリカの女性海外宣教師の前歴には圧倒的に教師経験者が多い。金城学院に来日した8名の女性宣教師のなかで①のメリー・スマイス夫人を除くと、全員がある期間、アメリカで教師をしていたことが判る。スマイス夫人は父親が弁護士で非常に豊かな家庭に生まれ、軽井沢の別荘で夫のスマイス氏と出会って結婚してから、宣教師の妻として来日した。他の女性と違って、経済的に豊かな家庭環境にあったので、アメリカでの職歴はなかった。それから考えれば、他の女性宣教師はスマイス夫人ほど豊かではない中流家庭の出身者で、アメリカ在住時代も経済的に自立する必要があったことが判る。19世紀後半のアメリカ社会では、女性が職業を持って経済的に自立することに対して、あまり好意的ではない環境にあった。特に南部の伝統的な淑女（南部の三大特徴は、南部弁、南部料理と南部美人と言われ、女性の美しさに対して高い敬意を払っていた）は夫の収入に依存し、金銭を自分で稼ぐ仕事につくことには否定的であった。教会やボランティア的な慈善活動は認められたが、男性と同じように働くことは *unwomanly* と呼ばれ、非難の対象となっていた。

教育を受けた女性に認められた唯一といってよい職業は教師であった。しかし、南部の社会はこの分野でも女性が生きるのに厳しいものがあつた。すでに東北部や西部では、19世紀の後半には教師は女性が独占的に従事する職業分野となつてきていた。教師の給与は男性が一家を養うことができるほど高くないために、男性は教師の職業から次第に撤退していった。また南北戦争後は、北東部を中心に工業化が進展し、男性にはもっと魅力的な職業が生まれていった。西部の開拓地では男性は農地の拡大に追われ、教師という職業は魅力に乏しいと考えられていた。教師が不足した西部の開拓地には、すでに女性の教員が過剰供給となつていた東北部の女性教員

が、移住して教師として教えるようになっていた。

南部ではこの事情がかなり異なっていた。1898年の統計によれば、教員に占める性別の比率が北部のマサチューセッツ州では男性1に対して女性12であったのに比して、南部ではほとんどの州で男女比が1対1で、教員の女性化が進んでいないことを示している¹⁸。南北戦争後、南部では「新南部」計画のスローガンの下、南北戦争以前の農業中心の社会から工業と農業とのバランスの良い発展を目指したが、それまで資本を奴隷に投資してきた南部には工業化に必要とされる資本の蓄積が乏しく、北部資本も西部開発に向けられ、南部には入ってこなかった。19世紀後半、アメリカ全体が工業化の波に乗って大きく発展しているなかで、南部は経済発展から一人取り残されてしまった。北部では工業の発展によって女性の職業分野も大幅に拡大され、ローウェルの織機工場（1814年）に代表されるような女性の工場労働者も誕生していた。しかし19世紀後半の南部では女性の働く場所は非常に限られており、ほとんどが男性の農業従事者の補助者としての仕事に限定されていた。

教育を受けた南部女性にとって、女性に開かれた教師の門が狭かっただけではなく、生徒の数も極めて限られていたのである。南部の人口の3分の1近くを占めた黒人は、一般の白人の女性の教える対象からは除外されていた。貧困と文盲率の高さから一般の南部白人も子供の教育の必要性について十分な理解を示していなかった。そのため、在米中に教師の経験があった女性たちは、限られた南部の地域内で絶えず学校を転校しては求職を繰り返していたのである。知りうる範囲でも、④のランドルフは17年間のアメリカの教歴のなかで5回以上転職をしており、⑥のパタソンは僅か2年間に2校転校し、⑧のマッキルエンは6年間に3回転校していた。教師を取り巻く環境は金銭的にも厳しく、すでに述べたように、女性は男

18 *Ibid.*, No. 22 (1899), pp. 412-413.

性教員の給料の半分から3分の2程度で、平均300ドル以下であった。それさえも保証されたものではなく、絶えず休職の危機に晒されていた。適齢期を過ぎ、経済的に独立しなければならない独身女性にとって、教師という職業は十分に魅力的であったとは言えないだろう。専門職としての医師は、北部ではすでに19世紀の中頃から女子医科大学が誕生していた¹⁹が、南部ではまだ萌芽すら見られなかった。

バイブル・ベルトと呼ばれた南部では、聖職者に対する社会の尊敬は非常に高かった。特に聖職者や宣教師の家系は、地元の人々から一目置かれる存在であった。女性が外国に宣教師として派遣されることが決まると、教会を挙げて壮行会が開かれた。婚期を逸した女性にとって名誉ある瞬間であった。しかも経済的にはアメリカにいた時よりも安定し、現地でも、外国人に対する物珍しさも手伝って、ある意味では名士の取り扱いを受けることができ、現地の著名な人々の会合に招かれることも多々あった。貧しいアメリカの学校教師時代には経験したことのない光栄ある体験であった。

(v) 結婚

すでに在任期間のところで述べたように、独身の女性宣教師の一番大きな悩みは、結婚問題であった。すでに結婚してから夫人として来日した①のスマイス夫人や未亡人となって44歳で中国に行き60歳のとき来日した②のランドルフを除くと、結婚が独身の女性宣教師たちの最も大きな問題であった。③の「背が高くしてスリム、黒い目でふさふさした髪、いつもレースのカラーをしていた美人教師」パタソンは、来日2年目に同じ志をもって来名していた独身の男性宣教師C・K・カミングと金城で洋風の結婚式を挙げた。④のタムソンは前述のように、休暇帰国中に長老派教会牧師

19 アメリカの女子医科大学の歴史については、篠田靖子「19世紀の医学教育と女医たち」『アメリカ西部の女性史』pp. 103-126.

のアンドルー・M・マクラクリンと出会って突然に宣教師を辞職して、結婚してしまった。このことは外国伝導局に大きな波紋を投げかけた。こうした女性宣教師の突然の辞職は他のミッションでもしばしば起こっており、後任の人事を補給するために余分のエネルギーと時間とを必要とした。幸いなことに、男性の宣教師の補充に比べて女性の宣教師の人選は希望者が多かったので比較的容易であったが、折角、現地にも慣れて活動を期待していただけに、タムソンの辞任は当局にショックを与えた。こうしたケースは、若い宣教師であれば、必ず起きたことで、前記の8名の金城を支えた女性宣教師以外に、氏名を挙げていない短期間で辞任した宣教師の多くは結婚のために離職したのである。

㉔のベス・ブレイクニー・マッキルエンは同じ船で海外伝導に出かけたウィリアム・A・マッキルエン夫妻の妻が病死した後、ウィリアムの二番目の妻となったが、その時ベスはすでに40歳であった。宣教師の住んでいた世界は極めて狭く、同僚同志の結婚や再婚が多かった。こうしたチャンスを見つけられなかった女性は、同僚が次々に結婚のために離職していくのを見届けながら、厳しい孤独を経験したことを㉕のカートランドは記している。宣教という理想に燃えて外国で生活しているとはいえ、家族のいない寂しさは想像以上であったであろう。㉖のアーチボルドのように、キャンパス内の学寮に学生と共に生活し、疑似家族を作って生活した宣教師の例は他のミッション系の学校でも比較的多く見られた。

(vi) 宣教師が出会ったその他の困難

言葉の障害が、宣教師の環境を極めて限定的な狭いものにしていった。㉗のランドルフは来日した時、すでに60歳に達しており、長く日本に滞在する予定もなかったため、中国語は解したが日本語は全くできなかった。それ以降に着任した宣教師は、来日してから最初の1年から2年の間、東京で日本語の研修を受けることになった。しかし滞在期間の長短に関わらず、十分に日本語を操ることができた宣教師は極く僅かであった。㉘のヒ

ユーストンは例外的な存在で、毎日、日本人の教師から日本語を学び、積極的に日本語を生活のなかで使用した。語学だけではなく、日本の風習にも関心を寄せ、小笠原流の日本作法も学んでいた。宣教師だけではなく、異国で生活する外国人は語学をマスターし、相手国の文化を積極的に吸収するように努めることによって、生活の質と幅を広げていくことができることは、現代にも通じる真理である。

もともと宣教師の周りには英語を学びたい人々が集まってくるので、英語を話すだけでも生活はできた。しかし、現在と違って外国語を理解できる人は、当時、極めて限られており、英語だけで生活すると交際できる範囲は極めて限られてしまう。現在では西洋の文化に対して日本人は全くアレルギー反応を示さないが、19世紀末前後の名古屋は日本のなかでも保守的、排他的な土地柄で、しかも仏教の影響が非常に強いことからキリスト教に対して強い反感があった。キリスト教に対する迫害には宣教師を面前で罵倒したり、ツバをはきかけたり、石を投げつけたりする直接的な行動をとる場合もあったが、間接的には宣教師を遠巻きにして受け入れない消極的な拒否の形をとった。このためにも宣教師を取り巻く社会は、学校か教会、話を交わすのは英語が通じる生徒や教会関係者と宣教師仲間だけの極めて狭いものに限定されていた。

宣教師の生活には色々な法的な制約があった。宣教師が国内を旅行をするためにも、府県の知事を通して外務大臣の許可を必要とした。外国人は横浜や長崎などの外国人居留地以外を旅行することを厳しく制限されていたのである。また、居留地以外に定住するためにも許可が必要とされた。キリスト教伝導を居留地以外で行うためには、「健康保養のため」「学術研究のため」という理由によって「旅行券」を取得するか、「お雇い教師」にならなければならなかった。日本で生活するためには、その他諸々の法的な制約を受けていたのである。

1908年（明治41年）5月28日には金城の存続を揺るがすような地久節

不敬事件が起こった。地久節は皇后の誕生日を祝う祝日であった。この日に学院では「君が代」の代わりに「賛美歌」を歌い、「教育勅語」の代わりに「聖書」を読んだのである。これは内村鑑三の教育勅語不敬事件の名古屋版であった。この事件のために金城は廃校寸前の状態にまで追いやられたのである²⁰。更に1937年(昭和12年)には神社参拝問題で学院が揺れ、宣教師全員に学校退去が命じられる事態が起こった。その後、第二次世界大戦の進展と共に、外国人の在住が困難となり、1940年(昭和15年)に緊急帰国するまで、宣教師たちの苦難は続いた。

世界のキリスト教化のために困難を承知の上で来日した女性の宣教師たちは、主として女学校の設立と運営を通して日本のキリスト教化を計ろうとしたが、その目的は容易に達成されるものではなかった。女性の教育の普及という意味ではある程度、合格点を取れたとしても、日本をキリスト教化するという意味では、初期の目標を遙に下回る成果となった。金城の卒業生も、開校初期の時代の在校生が非常に少なかった頃には洗礼を受けてクリスチャンになる者の割合が比較的高かったが、創立期の熱気が冷め生徒数が増加すると、受洗者の比率は次第に減少する傾向をみせた。宣教師たちの宣教に対する熱意が、日本のキリスト教化という面では現在に至るまで、その実を結ぶことはなかったと言ってよい。しかし宣教師としての任務を終えて帰国した後も、教え子が洗礼を受けたという知らせを受け取った時に、宣教師は小躍りで喜んだと伝えられている。

おわりに

女性宣教師とは、特別に信仰深い女性が果敢な決断を下して、異郷に飛び出し、殉教者の心で生涯をキリスト教の伝導と文明の遅れた人々の教育

20 地久節不敬事件については、『金城学院百年史』137-139頁。

に献身したという、悲劇のヒロインとして描くことは、時として宣教師の人間味を失うことになる。19世紀のアメリカ社会では敬虔さは女性の特徴と考えられ、家庭や社会で信仰の中心的な役割を演じてきた女性にとって、宗教的な活動を熱心に行うことは、美德でもあり、生き甲斐でもあった。多くの女性は国内に留まって、女性の敬虔さ、信仰深さを示すために活発に教会活動に参加した。女性解放が遅れていた南部でも、教会は女性が一人で外出できる唯一の場所であった。アメリカでは「教会の礼拝に日曜日毎に定期的に出席する人（チャーチ・ゴアー）が善良な市民の条件である」とまで言われていた。

建国当初からアメリカ大陸のキリスト教化に熱意を示したアメリカ合衆国は、19世紀中頃までに陸続きの領土拡張が限界に達した頃から、アメリカ人の宣教熱は、国内の西部フロンティアを飛び越えて、海外に移動していった。アメリカの数多くのプロテスタントの教派は競って海外に宣教師を派遣したのである。この活動を側面から支えたのが、アメリカに在住して教会を支え、海外宣教のために、自己犠牲的な奉仕を行った普通の信仰深い女性たちであった。海外で活躍する宣教に必要とされる資金は各派の海外伝導局を通して配付されたが、その資金は豊かな社会階層の大口の寄付だけに頼ったのではなく、一般の教会員が自分の誕生日に教会に誕生日献金として寄付したり、鶏を飼育してタマゴを生まれ、それを売却して当てるなどの小さな奉仕活動の延長線上からも得られたものであった。また、宣教師たち自身が自分の私財を海外伝導のために寄付した例も決して稀ではなかった。

実際に海外に出かけて宣教を行ったのは、こうして女性の中の代表としての人生を己の意思で選択した女性たちであった。多くの女性宣教師は当時としては比較的高い教育を受けていたが、「愛」による結婚が理想とされていた時代に、たまたまそのチャンスを逸してしまったために独身者としての人生を心ならずも選んだ女性たちが多かった。当時の社会では、高

学歴の女性が自立して生きていくためには、教師という職業が最も一般的な選択であった。海外宣教師となった女性の多くがこの社会層の出身者であった。宣教師の道を選んだ女性の周囲には、海外伝導に直接・間接に携わったことのある人物がいて、そこから具体的な情報を得て海外伝導を決意した事例が多かった。アメリカから続々と来日した女性宣教師の中には、結婚や病気のために夢を中断して途中帰国した者もいたが、長年にわたって日本に滞在し、中には異国に骨を埋めた女性宣教師もいた。

宗教上の迫害はあったが、日本は他のアジアの国々と違って、女性宣教師の活動を比較的歓迎した国であった。特に文化の伝播という教育事業においてはかなり成功したと言ってよいであろう。しかし厳密にキリスト教信仰の伝導という点では、いまでもクリスチャンの数が極めて少なく、その点では、アジアの他の国よりも成功しなかったと言えるかも知れない。しかし、アメリカの宣教師の活動も、現地の事情を考慮しながら、次第に宗教の伝導第一主義から後退し、キリスト教をベースとしながらも、宗教を媒介としないでも受け入れ可能な価値観を前面に押し出すことにより、日本の社会に広く受け入れられていったのである。このことは、「道徳の守護者」としてのアメリカ女性に伝統的に備わっていたジェダーの特性を最大に活用することによって、アメリカの文化を日本側が受け入れ易くした側面があったことを強調してよいであろう。